

編集後記

『眞實心』第三十八集が出来上がりました。二十八年度も宗教講座は五回行われ、意義深いお話ばかりで多くの学びがありました。改めてご講話を振り返ってみたいと思います。

1 「女性のキャリアはどう変わる」(加藤千恵先生)では、「男性たちが作り上げてきた学問やさまざまな仕組みを、女性たちの目で捉え直したらどうなるか」という問題意識「女性学」の立場から、本学学生が自らのキャリアを創造することを促すお話でした。女性としての生き方を女性が考えることは昔からなされてきたことですが、男性主導の社会、文化の歴史の中で形成された性差(ジェンダー)を意識的に認識し、ジェンダーのもつ「思い込み」から自由になることが女性のキャリアを変えていくのです。

ジェンダーの問題は人権の問題です。同時に「たましい」と直結する問題です。性は身体の問題ですが、「身体の問題はたましいの問題にもっとも近い」からです。

2 「障害者のいのち——歌を歌いながら考える——」（小畑清剛先生）では、身体障害者が求める「社会的承認」について考察を深めていきました。身体の問題は心に直結しています。その心の中核に「たましい」があります。たましいが身体ともっとも近いところにあるのだと臨床心理学の故河合隼雄先生から聞いたことがあります。

まさしく小畑先生は身体障害者の社会に対する「人間として承認されたい欲求」の根深さを語りながら、社会からの「社会保障制度」という承認のあり方（共助の精神）に言及していかれました。ここで、共助の精神が、本講座の「宗教」の核となる「たましい」につながっていることがあきらかとなりました。

3 「子どもと家族を支えるケア——保育と看護の協働——」（末永美紀子先生）では、障害児と健常児をいっしょに保育する共生保育の実践を語るとともに、保育士と看護師といった専門職がいっしょにはたらく際にも「共生連携」する実践を語っていただきました。保育の対象を「ケアする」ことでは、それぞれの専門別の仕事は切れ目なく一致するので、「保育」と「看護」の共通対象は共に「ケア」のニーズがある子どもなのですから。共生連携・健常と障害の共生によって子どもたちの心とたましいを育てる、排除と差別を

無くす人権教育が実現することでしょう。

4 「子どもの育ちとおもちゃ」（柿田友広先生）は、幼児教育の先覚者フレーベル（独）の「遊びを中心とした幼児教育」の中から生まれた「おもちゃの元祖」を実際に持参して遊び方を実演しながらのお話でした。手作りおもちゃは、すでに教育的な意図のもとに工夫を凝らしてつくられているので、夢中で遊ぶうちに子どもは工夫の仕方、学習への好奇心などを身につけていく。子どもの絵本についても、実際に作品を読みながら子どもに響く効果が仕込まれている作品の工夫を解説してくださいました。夢中になる遊びこそが心とたましいを育てることを学ぶことができました。

5 「カウンセリングと宗教性——魂の居場所を求めて——」（加藤廣隆先生）では、こころにささった釘を抜く寺で住職をしながらカウンセリングも行ってきたユニークな経験を聴くことができました。釘抜地藏石像寺の一番カウンセラーはお地藏さん。二番カウンセラーが自分だと加藤先生はおっしゃいました。

「たましい」は「縁」を結んでくれる一方、「物語・ファンタジー」をもたらすのです。

人生の途上で「ふと思ったとき」にたましいが働き、意味のある偶然の出来事が起きて「自分の物語」「こころの旅」ができるのです。ふとした出会いで「ご縁」を得た人々の物語を聴かせていただきました。これも宗教講座のご縁であったと思われれます。有難うございます。

(編集委員会)